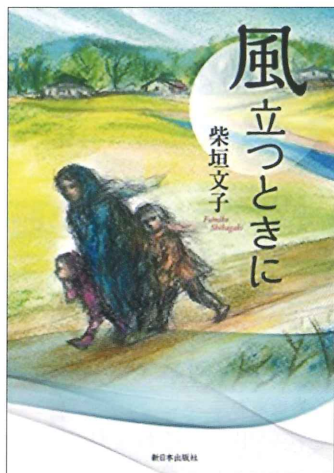


柴垣文字著

新日本出版社 2300円+税

風立つときに



評者 青木 資二

著者の柴垣文字氏は、全国で上映され好評の、映画復興奨励賞を受賞した「校庭に東風吹いて」（沢口靖子主演）の原作者である。

本書は京都の小学校を舞台に、福島から転校してきた姉妹と母親、担任や同僚、学校の様子など時代背景に触れて描いている。3・11以降、震災や原発災害に関わる作品は多々あるが、被災の子どもたちや親、教育現場を真正面に据えた文学は初めてであろう。

母親は「福島でなく違う所から来たことに」と担任の由希に頼み、「故郷を捨て、逃げ出して来た」と苛む。言葉少ない姉、アカリの手は荒れ、腕には黒い痣がある。母娘の語れない悲しみや傷痕にどう寄り添うか、由希が無力感を抱きながらも精一杯向き合うなかで、次第に悲劇的な事実が明らかになっていく。

離婚した母親の再婚などからノラ猫に石を投げる男子へも、由希は「自分の内側にこもって痛みを耐えている」「社会は子どもにとっ

て痛いことに満ちている」と思いを馳せる。「全国学力テストで上位を」「愛国心が不可欠」と語る校長。「日本人の誇りは教育の中軸」と言う主幹へ、若い教員は「福島の人にとっての誇りとは何か」と問う。管理主義が横行する学校現場を養護教員は「泥の船」と称し、組合員の若村は「道徳の教科書は子どもたちが抱えている悲しみや苦しみを置き去りにする」と指摘する。

“津波ごっこ”や「ホーシャノーが来た」の落書きなど深刻な問題に、由希を中心に苦悩しながらも支え合う教職員の姿に心が温まる。気弱な母を励まそうと、アカリは池に鯉を捕りに行く。探しに来た母とアカリが池の中で抱き合う最後の場面は、映像となって浮かび上がり、惹きつけられる。

寄り添うとは。子ども・教師不在の教育政策の下、教育のあり方を問うている。

(日本民主主義文学会)

編集後記

▽「戦争の真実を知れば知るほど、次の世代に伝えねば」「ここに人あり」の野村路子さん、その熱意と行動力は今も変わることはありません。▽テレジンの子どもたちの、この世に生きた証ともいえるべき絵は、日本中の多くの人々の心の中に生き続けています。子どもたちに描くことを通して生きる喜びを教えた女性フリードル・ディッカーの生き様とともに。▽沖縄県知事選挙の結果に大いに励まされ、かつ国民ひとりの課題として責任の重さを感じます。同様に南北朝鮮の統一と非核化は日本の侵略の歴史が大きく影響している事も。なによりの「学びの秋」でありたい。▽研究所の「幼年教育」研究委員だった瀧口真央さん、教育相談室の相談員で、30数年自主夜間中学を運営してきた金子和夫さんが逝去されました。心よりお悔やみ申し上げます。(山内)